

末黒野

すぐろの

11月号 (通巻843号)



半円の虹

小川 玉泉

(名譽主宰)

半円の虹郷愁を湧き立たす

雷雲のたちまち迫り露座仏
面売りば振り鉢巻き宵祭
半円の虹郷愁を湧き立たす
闇深みニタ声のみの草ひばり
ひぐらしの輪唱に丘昏れにけり
秋高し五彩に映ゆる鮑殻

虹は大自然の不思議さについて、眼を開かせてくれるものの一つである。雷雨の後、大空いつぱいに現われた七色の半円は、見とれずにはいられなかつた。関西から神奈川に移つて六十余年。阿夫利嶺の空に懸かつた半円の虹に、六甲山系に懸かつた虹同様、手を叩いた。

ちちろ

松本三千夫

寄れば引き退れば寄する秋の波
裕次郎灯台秋の浪猛けて
鴟高音遠見の富士の雲を佩き
新涼やハンカチの耳折り揃へ

序破急のリズムに適ひ秋の風
森の道溪谷の径秋のこゑ
野の風の攫ひ残せり秋の蝶
爽やかや浅瀬を渡る魚の影
石あれば影あり昼を鳴くちちろ
稚抱けば反つて泣かるる秋暑かな
管長の静寧の軸涼新た
鴟鋭声色づく棚田五十枚

鯨日和

黒滝志麻子

(副主宰)

水音に落ちてゆきけり恋蚩
月下美人今宵開くと香を放つ
美濃鍛冶の五徳のすわる夏炉かな
鯨日和海へ伸びゆく滑走路
さまざまな倉庫映せり水の秋
竹伐るや真青な空を騒がせて
二の腕の衰へしかと盆支度
空澄むや黒部の水のきらきらと
笹舟の浮きつ沈みつ秋うらら
糸とんぼひかりのかわく池の上
紅深くたたむ夜更けや酔芙蓉
ななかまど風に揺れては朱を深む

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

鴨涼し

森清信子

磧覆ふ川の土色梅雨の雷
剝製の鷹の爪欠け梅雨寒し
梅雨晴の亭午の鐘や光堂
暮れ方の海遠退きぬ浜おもと
清流に家毎の橋鴨涼し
常滑の弾く日の斑や糸とんぼ
舞殿の新しき御簾朝の風
夏休み少女つきたる小さき嘘
平穏なる世の中の欲し蟬しぐれ
目の覚むるやうな沢水閑古鳥

青田風

安斉久英

噴水や楽と光の文あやなせる
青茅の輪戦前戦後永らへし
牧牛の姿態まちまち青田風
菖蒲田の水の乏しき水車かな
滑空の鳶に挑めり梅雨鴉
滴りや苔の青さのさやかなる
老鶯の声張る背山雨意の中
崩るるも立つも束の間雲の峰
山裾に湯煙這へり花ユツカ
睡蓮や池の余白を雨意の風



暑気払

石黒興平

ほうたるの飛び交ふあたり闇の濃し
汗噴くや漠自慢の神輿瘤
相当の神酒聞し召し祭獅子
消防の半纏まじり荒神輿
先導の高き幣束神輿操む
垣間見る地球の闇や蟬の穴
身のこなし得手に媪の踊りかな
理髪屋の風鈴子守唄めきぬ
激辛のカレーもて締め暑気払
携帯にかかりきりなり帰省の子

盆

田中臥石

梅雨明けの妻のバリカン鬢走る
はちす田を抜けて鶴啼く俄雨
石庭の石の雨滴や萩乱る
墓掃除してゐる妻や海の音
終戦の日や台風の海荒るる
妻とふたりきりおん母の送り盆
行合の稲田を鷺の滑空す
遠き日の瞼にもあり芋殻の火
朝涼や妻と約する家族葬
生ビール残暑払ひとしたりけり

峡泊り

森清堯

黒南風や砲声重き富士裾野
凌霄や未だ決まらぬに抛りどころ
稿つぐや書斎の西日避けられず
蘆茂る枝道を採る不安かな
青柿や文字新しき案内板
そこここに嘆声の洩れ蓮の花
峡泊り山気深むる遠河鹿
干し網の光る鱗や土用波
広島忌古井にとどく朝の日矢
早稲の香の弥生遺跡にとどきけり



乙矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



秋 暑 し

齊藤マキ子

海の日やボトルシップの風孕み
嶺々青し沢音近き御師の宿
涼風やブラスバンドの音合はせ
可も不可もなく身軽や半ズボン
水打ちて舗道の熱を放ちけり
空蟬の雌雄論争子ら寄りて
溶岩原に獣の匂ひ秋暑し

あいの風

堺 昌子

茶屋街の紅殻格子夏燕
池端の琴柱灯笼あいの風
青嵐鐘つく僧の鋭きまなこ
白南風の湖上をひろく帆曳船
法の池の思はず声を古代蓮
身の皮をはぎたき暑さ台所
むくろじの青き実落つる送り梅雨

団 扇

吉田きみえ

もつれぬし夏蝶石に翹休む
眠る児の涙を煽ぐ団扇かな
星ひとつ添ひ梅雨明けの幼月
里晴れて老鶯の声切れ目なし
風あるも波なき沼や水馬
子ら三人分教場の夏休み
父母の年超えたる幸や墓洗ふ

青炎集

松本三千夫選



横浜 芝田幸恵

鋭角の線引くさまに夏つばめ

言ひ訳のなんとむなく茄子の花

大地這ふ根の力こそ夏の草

炎天を百年の慄怯まごころ

寝嵩なきわが寝姿や明易き

夕鴉の夥しさや夏果つる

横浜 渡辺絹代

山椒魚八方尾根に出合ひけり

アルプスを望むリフトや車百合

サングラス外し手かざすお花畑

リフトに乗り流離のおもひ大花野

高原の風にひと息吾亦紅

朝霧のリフトの下の花野かな

横浜 鏡英子

タラップを上る白靴旅始め

風の海航ける巨船の白夜かな

潮風にさらはれ夫の夏帽子

漂流の氷河の崩れ目の当り

海風やデッキの椅子の昼寝覚め

アラスカの岩壁離れ星涼し

横浜 戸田澄子

縁台の昔に浸り遠花火

やきとりを買ふ列にをり納涼祭

平和なる飢ゑ無き国に終戦忌

秋風や猛犬注意の犬も老い

老犬に歩幅合せて月の道

大雨警報出て降らぬ日の秋暑し

横浜 松浦哲夫

老人が主役の団地夏まつり
汗かきて腰の痛みを忘れけり
夜明けはや生きる証と蟬時雨
蟬の昼第二楽章待つ静寂
祈る日の続く八月空淡し
敗戦日十七歳の彼の日かな

横浜 太田良一

名画座に昭和の風や扇風機
ふて寝とも紛ふ左官の昼寝かな
梅雨じめり会はねば言葉錆びにけり
網干して漁港狭むる晩夏かな
水打つて飴切る音の始まりぬ
隙間なくジャズの立見や秋暑し

横浜 東小菌美千代

峰雲やかんかん照りの甲子園
白南風に乗り来る読経檀那寺
ビル街の辻に素秋の風立ちぬ
名刹の庭の静寂や初尾花
牛の目に映る蒼天涼新た
朝顔や早開店の茶房前

横浜 坂口郁子

海底トンネル抜けて大地や草いきれ
ムックリの響くコタンの夏炉かな
海猫や小樽運河の夕日濃く
玫瑰や鯨御殿のいま昔
干草の匂ひ積み上ぐ牧の朝
駒ヶ岳墨画となりぬ霧襖

横浜 小嶋紘一

誰れ彼れの生まれかはりや揚羽蝶
絶えまなき老鷺の声妻の墓
蟬時雨生者必滅てふ言葉
内陣に紛れ込んだり秋の蟬
砂の城波にくづる処暑の浜
風爽やか牧水の詩口遊び

横浜 小田嶋野笛

網戸抜け青き匂ひの夜風かな
お茶は宇治などどこだはり水羊羹
白焼の山葵効かせて土用丑
すててこや号風天と発します
ハンカチや隠しの多き紳士服
夏果つる空へ逆転ホームラン

耕 土 集

黒滝志麻子選

本間せつ子

ゆかた着て乙女の白きうなじかな
夕焼けや丘染まりゆく遊園地

濁流の渦巻き走る夏の川

夏大根そば湯に入りて辛く有り
草いきれ水かさを増す千曲川

野村 重子

五十鈴川彩とりどりの石涼し

初蝉や神苑の樹々湧き立てり
内宮や被る間のなき夏帽子

弧を描く湾の平らや夏没日
ふんだんに伊勢の鮑を志摩泊り

長田 厚子

床上げの母とくぐれる茅の輪かな

睡蓮の動くや鯉の跳び跳ねて
茄子洗ふ茄子紺色のいよ濃し

直売の胡瓜の旨き夕餉かな
颯爽と日傘の紳士通りけり

成井 隆之

暁け方の寝床に迫る蝉時雨
風鈴の音に急かされ庭仕事

男鍋の工夫に工夫夏料理

枝豆をつまみに酒宴盛り上がる
処暑厳し書斎机のメモの山

横浜 是松 三雄

世渡りは下手のままなり七変化
夕虹を見ず雑踏の八重洲口

真赤なる嘘も真も薔薇の園

戦争と犬猫嫌ひ生身魂

バーテンの訥弁が良し水中花

佐藤 康子

炎天や岐阜城めざすロープウェイ

篝火や鶴匠の立ち居隙の無き

語り部の座敷わらしや夏炬燵へ

篝火や鶴匠の顔の黒びかり

釣り糸をたらし木蔭に三尺寝

新井八重子

みんみんの一匹庭を支配せり
日に負けて何もせぬ日や日日草

蝉時雨生れし子の声加はりて

駿馬めく形選びぬ瓜の馬

心地良し素足にすなる風呂掃除